



TITLE:

現代エジプトにおける宗教と国家
ー中道派にみるイスラーム政治思想の現代的展開ー(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

黒田, 彩加

CITATION:

黒田, 彩加. 現代エジプトにおける宗教と国家 ー中道派にみるイスラーム政治思想の現代的展開ー. 京都大学, 2017, 博士(地域研究)

ISSUE DATE:

2017-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k20499>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

(続紙 1)

京都大学	博士（地域研究）	氏名	黒田 彩加
論文題目	現代エジプトにおける宗教と国家 —中道派にみるイスラーム政治思想の現代的展開—		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、中東地域研究における重要な研究課題である宗教と国家の関係について、現代エジプトを事例として、イスラーム中道派の主要な思想家の著作と活動を取りあげて考察をおこない、原典研究と臨地研究と合わせて、総合的な研究をおこなったものである。</p> <p>第1章は、イスラーム政治思想の歴史的背景を瞥見した上で、国民国家が形成されて以降の中東諸国においてイスラーム政治思想がどのようにして展開してきたかを論じている。理論的な問題として、イスラーム復興の進展や世俗化論の後退にともなう政治思想の位置づけを再考し、特に政治思想のスペクトラムの中で「中道主義」をどのように理解すべきかを検討し、本論文における「イスラーム中道派」を具体的に定義づけている。</p> <p>第2章では、19世紀以降の近代的なエジプト国家の成立を検討し、そこにおける宗教と国家の関係を論じている。特に、アラブ、アジア・アフリカ、イスラームという3つの地域的重層性の中にエジプトを位置づけ、国民主義、アラブ民族主義としてのナセル主義、イスラーム復興運動などの展開を描き出す中で、中道派の運動や思想家たちを位置づけている。「アラブの春」の一環をなす2011年の「1月25日革命」によって、エジプトにおける政治と政治思想の布置図は大きく変わったが、本章の最後で、2011年以降に政治潮流がどのように多様化したかについても俯瞰している。</p> <p>第3章では、中道派思想家の重要人物として、国際的な弁護士でもあるサリーム・アウワーを取りあげ、その思想において、イスラーム国家論と宗教共存思想がどのように展開されてきたかを、近現代のエジプトにおけるユダヤ教、キリスト教、イスラームの関係史に即して、丁寧に論究している。特に、アウワーが主唱する宗教共存論の基盤としての「イスラーム文明計画」を詳しく論じている点は評価に値する。</p> <p>第4章では、中道派思想家のもう一人の重要人物として、元裁判官でイスラーム法学にも詳しいターリク・ビシュリーを取りあげ、現代国家とそこにおけるシャリーア（イスラーム法）施行問題が持つ緊張関係などの検討を中心に、ビシュリーの思想的貢献を論じている。社会が宗教性を強めると時に宗教間の対立や紛争が激化するが、それを防止するために彼が提唱している「基礎潮流」の概念に大きな焦点をあて、ビシュリー思想の社会的貢献についても論究している。</p> <p>第5章では、「1月25日革命」がエジプトにもたらした政治の流動化、政治潮流の多様化を検討し、かつては中道派の社会運動として重きをなしたムスリム同胞団が没落する</p>			

ことによって生じたイスラーム思想の困難な状況を的確に描くと同時に、そのような新しい状況において中道派が果たしている役割と今後のありうべき貢献について検討を加えている。とりわけ、リベラル勢力や世俗主義との関係において、これらの近代的な思潮とイスラーム的な傾向を合わせ持つ中道派が果たしてきた「架け橋」としての役割についても、積極的な評価を加えている。

結論では、以上のような研究の成果を総括して、イスラーム政治思想史の中で、中道派思想家たちが伝統を継承すると同時に革新的な思想展開をおこなっていること、1970年代から「アラブの春」に至るエジプトの政治・社会状況の中で彼らが大きな貢献をなしてきたこと、現代エジプトにおいて政教関係をめぐる相互交渉、接近、対立が展開してくる中で中道派が重要な役割を担っていることなどを結論として述べ、中道的なイスラーム国家論の到達点を明らかにしている。

(論文審査の結果の要旨)

中東地域は、19世紀以降に近代化が進む中で、さまざまな西洋的な思想潮流を取り入れてきたが、その一方で20世紀半ば以降にはイスラーム復興が顕在化し、政治および政治思想において宗教と国家の関係が大きな問題となってきた。中東域内で近代化における先行例として重きをなしているエジプトは、とりわけ、宗教と国民国家の関係、国民国家における諸宗教の共存、国家の制定法とイスラーム法の関係などにおいて、思想面と実践面の両方において、さまざまな論点を提供してきた。

本論文は、そのようなエジプトの中でも、多くの国民と結びついてきたイスラーム中道派に焦点を当て、その中でも思想的内実と社会的影響力の点で傑出した2人を取りあげて、原典研究と臨地研究を合わせて研究を展開し、エジプト社会全体と現代イスラーム政治思想の動態的な関係について考察をおこなっている。

本論文の意義として、以下の4点が挙げられる。

第1に、現代イスラーム政治思想について、大きな視野と徹底した原典資料の調査に基づき、俯瞰的なスペクトラムを獲得した上で、中道派思想家の思想的な内実を明らかにしたことである。現代イスラーム政治思想は20世紀半ば以降に多様化が進んでいるが、既存の個別研究では全体的なスペクトラムが示されないままに個別の思潮が論じられることが多く、本論文が21世紀初頭の観点から全体像を明らかにしたことは高く評価される。

第2に、中道派という、特徴を明らかにしにくい潮流について、具体的な思想家の著作、具体的な政治・社会運動の理念や行動などを綿密に調べることによって、その内実を明らかにしたことである。既存のイスラーム政治研究は、急進派・過激派に焦点を当ててのことが多い。社会全体の中で突出した思想や運動を対象とすると、確かに特徴の捕捉が容易で、論考としてもポイントを明らかにしやすい。それに対して、国民の広範な層に訴えることをめざす中道派の場合は、位置づけが非常にむずかしい。また、中道というものの性格上、対抗する潮流の変化に応じてその立場も変化するため、時間軸に沿った動態的な考察も必要とされるが、本論文はそれに大きな成功を収めている。

第3に、具体的な思想家として、サリーム・アウワー、ターリク・ビシュリーという2人を取りあげ、その著作を丹念に検討して、思想的特徴を明らかにしたことである。両者ともに、エジプトやアラブ、あるいは現代イスラームの研究者にとって、きわめて著名な思想家であるが、その重要性に比して日本でも欧米でもほとんどきちんとした研究がなされていない。そのような思想家について日本語で先端的な研究がなされたことは喜ばしい。

第4に、本論文が宗教共存を追求する思想家を取りあげ、現代中東における宗教共存の可能性について考察した点も、高く評価できる。近年の中東について、宗教対立や宗

派紛争が喧伝される傾向が強いが、それは現実のごく一部でしかなく、市井の中で実践されている日常の共存とそれを支える思想的な営為に着目することは、よりバランスのとれた地域像を得るためにも、また紛争を強調する認識が紛争をさらに強めるという悪循環を断ち切る上でも大きな貢献を果たしうる。

以上のように本論文は、中東地域研究、イスラーム政治思想研究、現代における政教関係論などを総合して、原典研究と臨地研究に基づいて大きな成果をあげた優れた研究である。また、中東政治研究、エジプト研究、アラブ思想研究にも大きく寄与するものである。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成29年1月19日、論文内容とそれに関連した事項について試問した結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。